©2022 YHAL, YITP, Kyoto University
京都大学基礎物理学研究所　湯川記念館史料室

心から受賞をお祝い

京大で開く 朝永博士シンポジウム

湯川博士と朝永博士ー京大が生んだ二人のノーベル賞物理学者が顔をそろえて十日朝「朝永博士ノーベル賞受賞記念シンポジウム」が京大基礎物理学研究所三階講演室ではじまった。

シンポジウムは同研究所の主催、京大ではもちろん、日本の物理学会でも朝永博士の受賞後はじめて行なわれる純学問的な祝賀行事。全国から学生、研究者約二百人が集まった。坂田昌一（名大）武谷三男（立教大）伏見康治（名大）中村誠太郎（東大）小林稔（京大）荒木源太郎（同）各教授ら会場は定刻前からいっぱい。

同十時半、湯川博士が演壇に立ちあいさつをかねて〝朝永理論〟の周辺を解説とくに朝永理論の初期のころ共同で開いた核中間子討論会の席上から超多時間理論、くりこみ理論の芽がみえはじめたのが印象に残っていると述べた。さらに同博士は共同受賞者のシュインガー、ファイマン（米）の理論と朝永博士の理論の違いやとんごの進展の方向などを約三十分にわたって話した。

ついで朝永博士は多面的な思い出話をすると前置きして研究の経展、超多時間くりこみ理論が生まれるまでを説明、第二次大戦前、ハイゼンベルク、パウリの理論に対する批判から出発して時間の概念についての新しい発見、そして晴れのノーベル賞受賞までの苦心談をユーモアをまじえて話し、参加者に感銘を与えた。

午後は量子電気力学について、十一日は強い結合の理論、多体問題（物性）をテーマにした研究発表と討論が行なわれる。

楽しげ〝栄光の学友〟

朝永さん 湯川さん 会場は拍手と笑い

シンポジウムの開会に先立って、同十時半すぎ二人のノーベル賞学者がそろって会場に姿を見せた。湯川さんがにこやかに朝永さんを先導。続く朝永さんも満面の微笑。晴れの〝里帰り〟に拍手がわき起こる。

二人のノーベル賞学者は左右両サイドに設けられた両博士のための特別席を避け、演壇に向かって最前列の中央にならんで腰をおろした。両博士とも黒っぽい背広で湯川さんはエビ茶、朝永さんは黒のネクタイ。朝永さんは健康上の理由もあって、この機会に計画された奥田総長や同級生たちの祝賀レセプションをいっさい遠慮したというが、服装にもこうした振るまいにも、京大学派の〝地味〟な伝統がにじみ出ているよう。

司会の内山竜雄阪大教授が朝永さんの前に歩み寄り「受賞おめでとうございます」とあいさつ。朝永さんがピョコンと席を立って会場に一礼すれば、またしても大きな拍手がわき起こった。

あいさつに立った湯川さんが「朝永さんの還暦でなにかお祝いをしようという話が出ているおりの受賞で、研究所の満場一致でこのシンポジウムとなった。久しぶりにおもしろい話がうかがえるだろう」と朝永さんをひきたてれ

ノーベル賞受賞の朝永さんをたたえ拍手を送る湯川さん

1966, 2, 10　京都新聞

c073-001-036